

所長あいさつ

長崎県教育センター所長 長谷川哲朗

## 春の構え

大村は花の音沙汰が続く。

学校は新たな装いをまとい、子どもたちの声が弾んでいることだろう。職員もまた、それぞれに清新な思いを抱いているに違いない。

校長も同じ。この一年、わたしはこの学校で何をやり遂げるのか。「春の構え」を定めなければならない。教育の営みと教師のありようは、そこから動き始める。

### 授業をつくる

あるべき授業、ありたい授業はどのようなものか、考えを語りたい。めいめいが自分の授業をつくる下地となるものである。しっかりと編み込まれてこそ下地となる。それはこれまでの経験と教育のこれからを織りなしたもの。そして、授業を見せ合い、気付きや思いを語り合う。そこに学びが動き出す。

### 子どもを見る

子どもを見る、大切にするとはどういうことか、思いを届けたい。教師の眼はプロの眼。見えているものの向こうを見抜く眼力である。いのちの宿り、心の揺らぎ、潜む力と可能性。純真な童心や少年の志の中に見え隠れする混沌。見ようとしなければ見えないものだ。その眼をもって子どもを見ようと意志することだ。

### 職場を共にする

一生懸命仕事をして、ほうっと息つく職場をつくる、その心根を伝えたい。助けを請う、だれかをたのむことは当たり前。きつい思いをしているとき、椅子や傘がそっと差し出されるような人のつながり。弱音を吐けば、それを受け止めてくれる人の存在。追い立てられる日々ゆえに、体温の温もりを大事にしたい。

コミュニケーションに以心伝心はありえない。「春の構え」を自分の言葉で語らい、職員と向き合って紡がれる言葉を聴く。そこに醸される信頼の上に、子どもたちの育ちは重ねられていくのだ。

